

あこがれの先輩に騙されて
肉便器にされたマネージャー

2014/2/22

Var. 1. 03

シナリオ…二階堂安芸

サークル名…ケチャップ味のマヨネーズ

■登場人物

主人公

宮下鈴乃（みやした すずの）

奥手で男子に免疫が無い1年生。

バスケット部のキャプテンの先輩に一目惚れしたものの、

自分からアプローチ出来なかった。

しかし物陰から見つめる鈴乃に先輩が気づき付き合います。

■ストーリー

初デート手を繋ぐだけでドキドキしている鈴乃。

先輩は最後に行きたい所があると、鈴乃をある場所に連れ込む。

そこにはバスケット部の部員達が待っていて鈴乃は無理やり犯される。

その様子は撮影されていて、鈴乃はバスケット部の新しい肉便器になると言われる。

処女を奪われたあとは部員からも輪姦される。

せめてファーストキスは先輩としたいと思う鈴乃だが、

先輩からは便器にキスなんかするかと言われてショックを受ける。

そして先輩が次は奉仕できるように仕込んでおくと命令して帰って行く。

そこに更に部員の手が伸びる。

初めて先輩の存在を知ったのは、友達の口からでした。

バスケット部にカッコ良い先輩がいるからウチの学校でやる練習試合を見学しようという事になり、それまであまり興味もなかった私も付いて行ったんです。

自分で言うのもちよっとおかしいかもですけど、私はその……胸が、大きくて、ジロジロ見られる事とか、……えっと、痴漢なんかもされる事があって……男の人は全体的に苦手だったんです。

「アレが、先輩……。はぁ……カッコ良い……」

でも先輩は、他の男の人とは本当に全然違いました。

バスケットの試合なんて初めてで細かい事はよくわからなかったけど、それでも先輩はとってもキラキラして、私は一発で先輩の事を好きになってしまいました。

それから気が付けばちよくちよく先輩の練習を見学するようになっていました。

ちようど今までマネージャーをやっていた子が転校してしまったのをきっかけに、思い切ってバスケット部のマネージャーをする事にしたんです。

「よ、よろしくお願ひしましゅ！」

先輩は緊張して嘔んでしまった私を笑わないでフォローしてくれたんです。

一緒に部活を続けるうち、そんな先輩のちよとした優しさに触れる事も多くなって、私の気持ちはただの憧れから本物の恋心になっていきました。

でもこの恋は、私の中だけで終わってやがて思い出として消えて行くような……そんな物だと思っていたんです。

「……本当に、私で、良（い）いんですか？」

マネージャーの仕事にもやっと慣れてきた頃の事でした。

先輩が私を呼び出して、「付き合って欲しい」って言ってくれたんです。

「そんな……とっても嬉しいです。こちらこそ……よろしくお願ひしましゅ」

自分でも信じられなくて、大事なところで嘔んでしまった私に、先輩は可愛いねって言うてくれました。

そして今日は先輩と初めてのデートの日です。

普段はあんまり胸が目立たないような服を着てるんだけど、せっかくのデートなので少し勇気を出して、身体のラインが出るちょっと大胆な服をこの日のために買いました。

先輩も似合うって言うてくれてやっぱり勇気を出して良かったと思いました。

それから映画に行つて、お茶をして、こうやって先輩と一緒にいるだけで本当に夢みたいな一日でした。

手を繋げたのは帰りに先輩が送ってくれるって言うてからで、それでも私は心臓が飛びでるんじゃないかと思うくらいドキドキしていました。

そんな時に先輩がこう言ったんです。「最後に寄つて行きたい所がある」って。

私はもちろん付いていきました。

先輩が連れてきたのは、バスケット部の部室でした。

告白を受けた思い出の場所です。

「先輩つてこんなロマンチックな事もしてくれるんだ……」

そう思つて部室に入った瞬間、それまでの楽しい気分は一気に終わりを告げました。

「あれ？ みんなどうしているの？ 今日部活休みだったよね？」

「やだ、やめてよ。なんでそんなニタニタ笑ってるの？」

「ね、ねえ、先輩も何とか言ってお下さいよ」

「……へ？ い、いやっ!? 腕っ、掴まないで下さい……うう……い、いやっ……!!」

(床に倒される音)

「きゃああっ!!」

「あ、やっ、やだっ! 放して……抑えつけないでえ! んっ、い、痛い!」

「先輩っ助けて! 部員のみんがおかしくなって……」

「……え? どうして、笑ってるんですか? 先輩?」

「嘘ですよね? 先輩がこんな事するなんて……そんな……」

「ひい……い、いやあ、あっ……こ、来ないで!」

「んっ、んん……さ、触らないで……」

「ち、違う……この格好は、誘ってたとかそんなんじゃないで……」

「いやっ! はあ、そんな……めくらないで……」

「ああ、ブラジャーが見えちゃう……うそ……やだ……何、してるんですか?」

「ん、はあ……はあ……いやあ、見ないで! お願いだから、みんな見ないでえ……」

「……初めから、こうするつもりだったんですか?」

「私に優しくしてくれたのも、可愛いつて言ってくれたのも、全部……」

「お芝居だったんですか?」

「そんな……」

「ひどいっ! ……どうして! どうして、そんなひどい事ができるんですか?」

「私……男の人が苦手で、だけど先輩だけは優しくしてくれて」

「だからマネージャーもがんばられて……本当に、好きだったのに……」

「……なんで、笑ってるんですか?」

「……前のマネージャーも似たような事を言ってたって……」

「それじゃあ、転校していったっていう前のマネージャーの子も……?」

「……バスケット部全員で、こんなひどい事してたんですか?」

「んんっ、い、いやっ、胸……触らないで……あっ、はああ……」

「先輩は、胸ばっかり見てくる他の人と、違うと思ってたのに……」

「はあ、んっ……あっ、あっ、あっ! そんなに手で、グニグニしないで……」

「いああ、んんっ、くっ……おっぱい、こね回さないで……」

「んはあ……やあっ、あんっ、乱暴にしないで……」

「んはあっ……んっ、んっ、ああんっ」

「くふっ……はあはあ……だめ、そんな風に揉まないで……」
「きや、ああんっ……ふうう……」
「あ、はああんっ……どうして？」
「い、嫌だつて……思ってるハズ、なのに……」
「先輩におっぱい揉まれて、私……気持ちよく、なっちゃってる……」
「んあんんっ……ああっ！ やっ、はあ……いやあ、んんっ……はあんっ！！」
「い、はああ……くう、こんな、無理やり……痴漢されてるのと、はあ……」
「同じ、なのに……」
「やだっ、耳元で囁（ささや）かないで……私のおっぱいは、エッチなんかじゃ……」
「ああんっ、ない！ やあっ、はあんっ！」
「ち、乳首い……だめえ……ち、違います……」
「んんっ、これは……おっぱいを、はあ、揉まれたら……」
「勝手に硬くなっちゃうだけで……はううん、んああっ！！」
「お、お願い……はんっ、乳首が、はあ、擦（こす）れて……」
「痛い、から……手、離して……ひはあ、んんっ……ふああっ！」
「もう、こんな事……やめて下さい」
「今なら、私……誰にも言いませんから……だから、家に帰して下さい……」
「んはあ……やっ、いやっ！ ブラ持ち上げちゃ……」
「ふわあっ……ああ、んんっ……それだけは……お、お願いだから……」
「はうう……ひ、ああ……」
「き、きやあああっ！！」
「ひいっ……んんっ、くうう……み、見ないで……」
「いや、いや……あああ、私……部活のみんなに……」
「おっぱい、見られちゃってる……まだ、見せた事無かったのに……」
「……え！？ 今、カシャつて……」
「まさか、写真撮ってるの！？」
「うそ……いやあっ！ やめてえ！ 撮らないでえ！」
「い、はあ……んんっ、どうしてですか、先輩……？」
「こんな事しなくても……わ、私……いつかは、先輩と、こういう事もって……」
「思ってたのに」
「本当に……思つて、あんっ……ひ、ああ……」
「はあ……はあ……うっ、やだ……みんな、息が荒くて、怖いよ……」
「んぐっ、い、痛い……力、入れないで……」
「足、押さえてる手……爪が、食い込んで……かはっ！ い、痛いの……あああんっ！！」
「くはあ……な、なんで笑ってるの？」

「違う……わ、私は、おっぱい揺らして、誘ってなんか……」
「んあっ、おふうっ……くああ……」
「あ、ああっ……触り方、エッチすぎる……きやううん!!」
「や……んんっ、エッチなんて……い、言わないで……んっ、あん、ひゃ……んんっ……!!」
「んっふ……あ、はあ、あっ……さつきより……揉み方、強い……」
「んぐっ、ひいい……あ、んんっ!!」
「くああっ! こ、コネコネ……いやあ……あっ、んんっ……」
「ひぐう、あっ……くんんっ、はあ、はあ……」
「乳首が……手のひらで……潰れて……んはっ、く……はああんっ!」
「きやううう……やっ、エッチな顔なんて、してなっ、は、はううう……ん、くううっ!」
「んはあ……乳首、摘（つか）まないで……ふ、はあ……」
「あんっ……あ、くんんっ……は、ああんっ!」
「の、伸びちやう……はあ、おっぱい……こんな、おっぱい……引っ張られたら……」
「おっぱいが、伸びて、い、痛い……ああんっ!」
「んくっ、ひねるって乳首、いじめるの……」
「ふうんっ……だめえな、なんで……」
「はあ、私……気持ちよくなんて、なりたくないのに……」
「やあ……指でクリクリ……はあ、おっぱいの、真ん中……掘られるの、だめえ……」
「ううっ、はあ、おっぱい……あっ、熱くなってきた……」
「ああっ……はっ、はあ、もう……気持ちよくしないで……あっはあん!」
「はあ、はあ……こんなの、私、知らない……」
「たまに、痴漢される時だって、気持ち悪いだけ、なのに……」
「どうして? んはあ……もっと、ひどい事……されてるのに……いやああ!!」
「はあ……はあ……な、何だか、わからないのっ、来るっ!」
「おっぱい、弄られると……んはあ、身体（からだ）の内側から……」
「訳が、わかんないの……き、来ちやう……」
「え……? これが、イクって事……あっ、そ、そんな……」
「だって、私……自分でも、そんな風になるような事……」
「ふはあ、んっ、したこと……ないのに……」
「んんっ……だめっ、あ……いやあ!」
「こんな無理やり……ひい、んはああっ」
「くああっ、んふうう……うそっ、あああ……ひうん、おっぱいに、先輩の顔が……」
「あんっ、ふっ、はあん……ひうっ!」
「い、今……舌が……んくっ、私のおっぱいに、触って……あ、あああ……」
「ふはあっ、んんっ……やああっ……」

「あ、あ、あ……ひ、ひどい……私、まだ……キスだって、したこと……無いのに……」
「あふっ、んんっ、はっ、はああんっ……やめて……私のおっぱいで……」
「んはあ、じゆるじゆる……エッチな音立てないで……」
「くん……か、はあ……おっぱい……」
「舌で、コリコリ……されて……部活の、みんなに……見られて……んんっ、はあっ！」
「だ、だめっ……おっぱい、吸われるの、んはあ……こんなの、いやらしすぎる……」
「んんっ、あ、あ、あ……先輩に、ちゅうちゅうされると……」
「はあ……背中が、ビクビク……ん、ふわああっ！」
「も、やだあ……こんなの……ずっと、されたら、私……私……」
「お、おかしくなつちやうう、ああっ、んんっ！！」
「はっ、あっ、あっ、来る！ 大きいのっ！ 来ちやうっ！」
「あああっ！ くううんんっ！！」
「はあ、はあっ、あ、あん！ 飛ぶ、飛んじやう……ぐうっ……う、あああ……！」
「んぐう……ああ、はあ……ああんっ……」
「う、うそ……私……い、イッちやったの？」
「こんな、無理やりおっぱいを吸われただけで……こんなに、はしたなく……」
「いやあ……い、言わないで……私、そんなエッチな子なんかじゃ……」
「だって、こんなに、されたら……」
「撮らないで……お願いだから……」
「そんな、アクメ顔の記念なんて、こんなもの、誰かに見られたら……」
「私、もう生きていけない……」
「だから……わ、私は……淫乱なんかじゃ、違う……」
「だって、本当に……おっぱいを弄（いじ）られたのも……イッたのも、初めてで……」
「き、聞きたくないっ！ 違う！」
「おっぱいだけでイッたのは、私が淫乱だからじゃ、ない！！」
「私は、ずっと、やめてって言ってたじゃない！」
「ひや、ううう……私の下着……こんなに、濡れちゃってる……うそ！？」
「だって……ここは、触られてないのに……」
「あくっ、ふんんっ……こんなに、濡れてるのも……私は、欲しがってなんか……」
「染みちやあって……んはあ……あ、あくう……んっ、恥ずかしいから……み、見ないで……」
「や、やあ……だめえ……そこは、本当に、触らないでください……」
「こんな事、本当に……された事、無いの！ くんんっ、ああはっ！」
「じ、自分でも……はあんっ……弄った事、んんっ……な、無いのに……」
「んああ……クニクニ、しないで……お汗が、垂れて……」
「き、気持ち悪いから、あっ……はあ、あんっ！」

「くうんん……あはあつ、か、掻き出さないで……」
「ふあつ、ああ……ドロドロ……いやあ！」
「ひんっ、あつ、あつ、くあつ……」
「内側から……溢れて、きやああ……んぐつ、わああ……」
「そ、それが……私の、お汁……あんなのが、私から……」
「ネバネバして、い、いやらしい……」
「ふえっ……んんっ、か、嗅（か）がないで……エッチな匂い？」
「うそ……私、そんなんじや……んんっ……はっ……」
「あ、いやっ……口に入れるなんて……やだっ、き、汚い……」
「やああ……しや、しやぶらないで……」
「ふんんっ……なんで、私……こんな事で……んはあ、また……垂れて……」
「んくっ……し、下着……取らないで……やああつ、く……いやっ……」
「いや、は、放してっ！」
「んんっ、くっ……ああ……そこは、本当に、大事な所……だから……んあつ、んんっ……」
「い、痛い……足……放してよ！ お、お願い、だから……」
「はああ……ひっ、空気に触って……くっ、冷た……あああ！」
「むわっとして……私の、エッチな所……全部、見られちゃってる……」
「はあ、先輩にも……ただの、部活が一緒の男の子にも……」
「また、ここも、撮られて……あああ、こんなやつ、何が楽しいの？」
「へ、へらへらししないで……答えてよ……ううう……」
「ひああっ……んくあつ、指い……割れ目の所、なぞら、ないで……んああ、ふっ！」
「くはっ、あ、う、ああ……そこ、擦られると……んふっ……」
「さつきみたいに……また、ビリビリが、ああっん！！」
「あん、あつ……ふはあんっ、や……待って……な、何を！？」
「あ、いや……だめっ、指で広げないで……」
「はああ……また、撮られてる……私の中……写真に撮られちゃってる……」
「や、み、見せないで……そ、そんなの……見たくなんか……いやあああ……」
「んっ、く……指が、入って……あつ、あふうっ……」
「これ以上、入らない……んあつ……ひ、くふうう……」
「むうう、はああ……わ、私の中で……指が、はあ、動いてるの……」
「わかる……内側から……んんっ、擦（こす）られてるの、わかる……うはんっ！！」
「ん、はあ……ううっく……指で、もう……いっぱい……くふうう……」
「あ、はああ……ああ……」
「うう……だから、何度も……言ってるじゃないですか……」
「自分でも、こんな事したことっ、はあ……無いって……なのに、こんな……」

「うあつ……はあ……な、中で、指曲げないで……ひああつ！」
「んくっ……ひっ、んんっ……なっ、ほぐすのも面倒って、なんですか？」
「え……？先輩……ズボンに手をかけて、何を？」
「はっ……ま、まさか……うそ、ですよ？」
「うっ……ほ、本当に……脱いでる……ああ……」
「それが、男の人の……思ってたのと、全然……」
「先が尖って……そんなので突かれたら……私の身体、バラバラに、裂けちゃう……」
「んわああ……や、何して……うそ……ですよ？」
「いや、そんなの、入るわけ……」
「お、お願いです……それだけは……私……初めてなんです……」
「こんな所で、されるの……いや、なんです……」
「ひくんっ……うあ、くっ……先っぽが……ぶ、ぶつかって……る？」
「んんっ、おあつ……あ、ああつ……んぐっ、入って……くる……」
「はあ……押されて、苦し……ふああ……」
「ああ……これが、私の……初体験、なの……？」
「こんな、惨めな……んはあつ！」
「は、ううう……く、ううん……も、これ以上……無理……かはっ、むりい……」
「ひっ、いいい、痛い……あつ、な、なんで……これ……こんな……んああ……」
「やあつ、抜いてえ……んぐっ、ふああああ！！」
「ううんっ……はあ、ここが……処女膜……んっ、いや……」
「お、押さないで、くださいいつ……んんっ！！」
「くふっ、うう……そんな……これで、はあ……全部じゃないの？」
「いつ、いやあ……こんなに、痛くて、苦しいのに……」
「んああ……も、もう……入って来ないで……」
「んあ、私の中……メチャクチャにしないでえ！」
「中で……メリメリ……くああ……あつ、いや……い、痛い、怖い……んはああ……」
「くううう……ふっ、んあああつ！はっ！あああんんっ！！」
「あ、あああ……入れられちゃった……私、中に……」
「先輩のおちんちん……入れられて……血が流れてる所も……全部、撮られて……」
「ううう……ぐすっ、うううんんっ……」
「あははっ……そうだ……これは夢なの……」
「だって、先輩が、こんなひどい事する訳ないもの……」
「私は……きつと、先輩と付き合える事が幸せすぎて……」
「こんなに幸せで良いのか、不安になっちゃったんだ……」
「だから、早く目を覚まして……先輩と、デート行かなきゃ……」

「んぐうっ、ああんっ……痛いっ……うう……痛いよお……」

「やだっ、やだ……なんで、どうして……これ、夢じゃ……ないの……?」

「ひああ……まだ、動いたら……んああっ、んっ、んっ、んっ……くうう……!」

「ふんっ……あっ、ううっ、く……んあっ……先輩、いきなり……激しすぎっ……」

「こんな、自分しか気持ちよくないような……うはああ……!!」

「あ、あ、あ……締める、って……言われても……」

「はあ、いつ、痛いだけで……私……そんなの、わ、わからない……です……」

「いつ、ううん!」

「ひいあっ……んっ、掻き混ぜられる……私のっ、中が……ひううんっ!」

「ううんっ、い、やあ……じゅぶじゅぶ、音が……聞かせ、ないで……」

「んあっ、は、くううんっ!」

「あっ、あふうっ……あ、んっ、叩かれて……」

「ふぐっ、んんっ、苦しいっ……あ、あっ、んふううっ!」

「はあ、ああんっ……こんなに、乱暴にされてるのに、身体(からだ)が……内側から、熱くっ……」

「んはっ……きやああ……」

「ううんん……ふわあ……て、手も……はんっ……一緒に、おっぱい、も……ん、ああっ!」

「ひいんっ、ひいっ……はあ、あっ……おっぱいも、されて……すごくいい……」

「ふはあっ、ああ、ん……あ、あっ……ひあああ!」

「んあっ、んぐ、んっ……んふっ……こんなの、もう……」

「めちやくちやに……なっちやう……ああっ、うん……くはああんっ!」

「やっ……気持ちよく、しないでえ……」

「あ、はあ……い、嫌なの……わからなくなる……どんどん……欲しく、なっちやう……」

「ふわあんっ!」

「あんっ、あっ、ああん……」

「ゴツゴツ……ぶつかってるの、中で……感じられるようになって……」

「だめっ、いやあああんっ!」

「ふう、んっ……ひやあん……おちんちん、出たり入ったりするの……」

「いいっ……あっ、いい……気持ち、いい……!」

「んっ、はああ……んんふっ……腰が、ぐうっ……こねられ……い、はああっ!」

「はあんっ……あっ……中の色んな所……はあっ、擦(こす)られて……んんっ……」

「あああっ、はあんっ!!」

「くふっ……わああんんっ!! んぐあっ、今のっ……一番。深いっ!」

「私の中……全部、オチンチンで、埋められて……あ、あんっ!」

「ひい……ひいん、お腹の所、さわさわして……今度は、はっ……なにっ!」

「くう、はっ、はああ、ああん、あ、あ、あっ……はあああっ!!」

「あくう……うう、い、今の……な、何？」

「ひゃああ……目の前が、急に、真っ白に……ふあつ……ま、またつ……」

「くはつ、あつ、あつ、あぁあつ……腰が、浮いちやつて……」

「ビクビク……こんなの……私、耐えられない……んっ、んんっ!!」

「んぐっ……わああ……クリ、トリス……？」

「やだ……この、敏感な所……私の身体に……こんなに、エッチな……」

「ひゃああつ!! んんっ……やあつ……だめ、剥いたら……んぐう……!!」

「ふあつ、ふはつ……あんっ、あん、これ……すごい!」

「コリコリすると……んはつ、また……イツた、みたいに……は、ああつ、うああつ!!」

「ひいひいっ……お尻……ぐっと、揉まれて……」

「はふっ、ふ、深い……んんっ、あ、あ、あつ……うふうんんっ!!」

「あつふ……これ、だつこされてるみたい……やつ、だめえ……」

「はつ、はん、あつ、はぁ……手で、引きつけて……腰を打ち付けられて……」

「奥まで……ずんずん……あつ、ひゃああ!!」

「んんっ……先輩のも、おつ、大きくなって……もっと、いっぱいになって……」

「苦しい……んあつ、だめええ……」

「あはあんんっ、イキそう……つて、や……だつて、そんな事したら……」

「あ、赤ちゃん……できちやう……あつ、んうっ!!」

「くっ、ひゃあああ……あふううっ、きよ、今日は……本当に、危ない日……」

「だから……いやああ!!」

「い、いやあああつ! そ、それだけは、いやああ……んっ、はああんっ!!」

「うっ、ふあんっ……くうっ……あ、はあぁ……ち、違うう……んんっ……」

「あ、足が絡まってるのは……あは、んっ……欲しがってるからじゃ……んはあぁ……!!」

「うはあぁ……んくっ……いや、なのに……」

「んっ、そんなの……どうでも、良くなるくらい、んあぁ……」

「気持ちよくっ、んっ……あ、あ、あぁあつ……」

「あふう、うっ……んっ、イクっ、イク……イツ、はあぁあんっ!!」

「んっ、んううう……ああつ、はつ、んんうう……あぁひいひい……んんっ!!」

「うわああ、はあつ、んっ、出てる……お、奥につ……たつぷり、んくっ……中に、注がれ、んあ……くううんんっ!!」

「あああつ……はあ、はあ、はあ……まだ……出てる……」

「どくどくつて、震えて……も、もう……溢れてるのに……んんっ……」

そうして先輩はおちんちんを私の中から引き抜くと、私の方を振り返りもせずにもそくさ身支度を調べ始めました。

「あ、あの……先輩」

「先輩は、私のことが……好きだから、こんな事しちゃったんですよね？」

「私は、先輩の……恋人、なんですよね？」

すがるように声を振り絞った私を、先輩は鼻で笑いました。

そして私がどれだけ簡単に引かかったのか、楽しそうに話始めました。

先輩は、私みたいな子の初めてを奪うのが好きで、練習試合のあとバスケット部を見学するようになってすぐに、私の身体（からだ）は目を付けられていたのです。

「……うそ、だって先輩、あんなに優しくしてくれたのも、全部……お芝居、なの？」

呆然とする私を見下ろす先輩の目は、ぞつとするほど冷たいものでした。

最後に「次に使うときは自分から奉仕するように仕込んでおけ」と言い残して、先輩は部室から出て行きました。

「え……ちよつと、どこに行くんですか？ もう、終わりですよね……？」

「こんなひどいの……次とか、仕込んでおけて、一体……」

「ね、ねえ……みんな、もう、帰してくれるんだよね？」

「ひどい事されてるところ……写真に、いっぱい撮ってたでしょ？」

「だから、誰にも言えないから、もう……家に帰してよ……」

「そんな……これだけで終わる訳ないって……」

「私、もう、ひどい事……たくさん、されたのに……」

「役得って……い、いやっ！ 来ないで！ んああ！！」

「ひいっ！ な、なんで……みんな、ズボン……脱いで……いつ、いやあ！」

「ああ、ああっ！」

「ううう……こ、こんなに……おちんちんに、囲まれて、はあ……」

「わ、私……こんなに、大勢……む、無理……絶対、おかしくなっちゃう……」

「はあっ、あんっ……やめてっ、顔は……近い……せめて、ファーストキス、だけは……」

「んあ、むむううんっ！！」

「んちゅ、じゅるるっ、くっ……ぬ、はああ……んむ、あふんっ……」

「ふ……はあはあ……ひどい、ひどいよ……」

「初めてが……好きでも何でもない相手なんて……んっ……」

「むんんっ……舌が、やあっ……入って、来る……んんっ、ちゅ……く、むはあ……」

「くちゅ……んぐ……私の、舌……絡めないでえ……」

「ちゅちゅ……んむっ、はあ……歯の裏側、舐められて……飲まれる……」

「ちゅっ、むうう……あ、んんっ……くっ」

「んちゅ、んつく……はっ、ちゆる……ちゅ……唾（つば）が入って来……」

「あっ、んっ、けほっ……けほ……ん、むうう……」

「はああ……ん、ちゅ……んっん、あはあ……じゅ、ちゆる……はああ……んんっ」

「むふうう、んはあ……はああ……ひどいよ……」

「キスって、もっと……素敵な事だと、思ってたのに……」

「いきなり、こんなエッチなの、されちゃったあ……」

「んああ……ま、また……お、おっぱい……んっ……はあっ、んああ……んつく……」

「ひ、ひい……おっぱい、掴んで……はああ……」

「や、やだっ……おちんちん……押しつけないで……んああっ！」

「あ、はああんっ……ドクドクいつてるの……伝わって来る……」

「お、おっぱいから……熱くて、硬いのが……んひっ……ふううんっ！」

「ふうっ、んあああ……乳首、ツンツン……うはあ、あふ……く、あああっ！」

「きゃあ……これ、おっぱい……お、犯されてるみたい……」

「んんっ、え？　パ、パイズリ……？」

「んっ、くうああ……わ、私……おっぱいで、はあっ……エッチしちゃってる……」

「はあ……はあ……はあ……い、いやだっ……」

「こんな、変態みたいな……エッチ……はああんっ！！」

「うっ、く……お、おっぱいの間（あいだ）……挟（はさ）むの？」

「ああっ……う、埋まってく……見えなく、なるまで……ひあっ……あぐっ！」

「あ、ううんっ……すごい、おちんちんの……はああ、臭（にお）い……」

「こんなに……近く、んんっ……はあ、ああんっ！」

「んぐっ……あっ、濡れて……変な感じ……」

「はああ、おちんちんが……出たり、入ったり……」

「い、いやああっ……はあ、はあ……お、おちんちんの、先の割れ目が……」

「ヒクヒクしてるの、見える……ひゃあっ……し、汗が……」

「うくうう……なに、これ……？　これが、精液……？」

「……ち、違うの？　先走り……んはあ……に、臭いが……はあんっ」

「わ、私の胸……道具にされてる……くは、んっ……」

「自分が、気持ちよくなるための、道具に……ひっ、ああっ！」

「はあっ、んえ……私の谷間、汗で……いあ、やああ……んんっ、はあ……うわああ！」
「んっ……音が、ぬちゅんちゅ……あ、あ、あ……」
「ヒ、ヒクヒクしてるの……わかる……うううっ……」
「ふはあ、で、出るの……？ おっぱいに……精液、かけちゃうの……？」
「ひいひい……やつ、やめてえ……ん、やああ……」
「んんくっ……腰が、突き出されて……も、もう……こんな、はああ……」
「あはああっ、うううんんっ……ふはああああっ……」
「ん、あ、熱くて……顔、ドロドロ……おっぱいにも、垂れて……あっ、ああ……」
「はああ、くっ……次からは、自分から自分からやれ……」
「お、男の人は、こんなのが……気持ち、良いの？」
「いや……見せないで、もう……こ」
「んなに、エッチな所撮られて、逆らうなんて……出来るわけ……」
「くああっ……い、痛い、んぐっ……今さら、抵抗なんてしないから……」
「乱暴しないで……あっ、うううんんっ……」
「な、なにこれ……こんな、犬みたいな格好……いやああ……」
「ひいひい……んあっ、や……押しつけられて……んっ、くう……見ないの、怖い……」
「あ、あ、あっ、また、入ってる……初めて、だったのに……」
「もう、2人目が……また、無理やり……ふうんっ、あっ……ああん！」
「ひあ……んんっ……腰、挿んで、いきなり……んくううっ……」
「ああはっ、ふあああんんっ……」
「や、やだ……い、いきなり……奥、コンコンされたら……」
「あはあんっ……やあっ……ああっ……」
「いやあ、あうんっ……んはあっ……ああん！ 乱暴に、動かないで……あ、うふあんっ……」
「くう、んんっ……だ、だめえ……ズンズン……だめえ……うっ、はあん！」
「んんっ……く、ひやあっ、んんっ……」
「こ、壊れちゃうっ、身体が、あっ、あっ、バラバラに……ひい、ひっ……」
「いあああ……んんっ、くう、ひやあっ……」
「どっちが、良いかなんて……わ、わからない……そんなの、ふああ……」
「し、知らない……うっ、はうう……」
「んああ……だ、だって……どっちも、いや……なのに……」
「私、無理やり……感じさせられて……んああっ……」
「ううっく、あっ……全然、はあ……意識も、してなかった……相手……なのに……」
「ひ、あああっ……」
「んぐ……い、はあっ……」
「うんっ、違う……私は、エッチなんかじゃ、ない……のに……あひやああ……」

「くふう……あ、ああ、あひい……か、顔の方にも、また……こ、今度は、何を……？」
「ひっ……目の前に、おちんちん……近づけないで……」
「ああんっ……んんっ、目、そらしても……に、臭いで……はあ、伝わってくる……」
「こ、これ……口で、なんて……あ、はあ……できない……」
「あんっ……や、き、汚い……んふっ、あはあ……」
「くっ……んんっ……顔に、ぺちぺち……はあ、やめて……」
「いやあ……うう、はあんっ！！」
「うはあ……ああ、今……激しく、突かないで……」
「あふっ……んあつ、声……ん、声出ちやう……ひっ、うう……あはああっ！！」
「んごお、ぐふうっ、んんっ……ぐふ、けほっ……」
「あ、はあ……うう……はあん、口の中……急に、んあっ……」
「む、無理だよ……がはっ……はあ……ん、やあっ……口の中、んああ……」
「臭（にお）いが……ぐうっ、く……」
「んああっ！ げほっ！ ごふっ、ぐはあ……口に、突っ込まないで……」
「の、のど……苦しっ、んはああ……」
「うう、キ、キス……あんっ……私から、おちんちんに……い、いや……そんなの……」
「くううんっ、ふんっ……あつ、はああ……やだ……断ったら……」
「んんっふ、無理矢理……あん、かき回されて……んんっ……」
「ふ、あああっ……やあ、あ、あんな……苦しいの……もう……いやあ……」
「ひいっ……はあっ……あふ、あんっ……だめ、そこだめえ……」
「んはっ、ああんっ……そ、そこ……ゴリゴリ、されたら、声がっ……」
「かはっ……あああん……！」
「うう……わ、わかったから……ああんっ、じ、自分から……キス、するから……」
「そこっ、んはあ……ばっかり、や……やめてえ、んんっ……」
「ああつく……ほう、はあ……んっ、ちゅ……んっふ……はあ、ちゅる……ああ……」
「はんん、んちゅ……ん、舌で……舐めるの……？」
「アイスみたいになって、そんなの……全然……んぐっ……」
「いいっ、やっ、やるから……しないで……はあっ！！」
「うっ、えく……れるっ、ちゅ……える、れる……に、苦くて、はああん……しよっぱい……んふっ、んああ……える……」
「んんっく、むああ……はっ、筋（すじ）の所……舐めるの……？」
「れう、うう……こうで、良いの……？」
「あふっ……そ、それで……根本から、上につ……あ、あつ、ああっ……うあ、はあん！」
「ひやあう……おおっ、んく……膨らんだ所……舌、絡（から）める……」
「えうう、うはあ……ん、あああ……ちゅりゅ……」
「はちゅ、あつ、んむ……ここが、カリ……んっ、ちよっと、ぎらぎらして……」

「れるううっ、じゅ、ちゅ……」
「んは、うああ……おっふ、んっ、下にも集中って……だって、そんなの……」
「あん、わ、わからない……おあっ、締めるなんて……そんな、出来ない……んうう……!!」
「ひゃあ、やつ……んあっ、はあんっ……」
「また、ガシガシ……口が、できなっ……ふはあ、できないいい……ああんっ!」
「あ、ひゃんっ……うぶっ、んんっ……ぐふ、ふうんっ……んんっ……」
「くん、かはああっ……むはあ……んん、すっ……口の中には、入れないって……」
「んごお、ぶはっ、言ってた……のに……んお、あふう……」
「んんっ……ふくう、舐めるだけじゃ……あんっ、イケないって……そんなあ……」
「むんんっ、はぶっ……あんんっ」
「かはあっ、んぐっ、首……掴まないで……ん、はああ……顎、持たれると……」
「あう、苦しい……」
「あ、上と下……んっ、じゅうう……はうんっ……くあ、両方なんて……」
「むんっ……いあ、ちゅ……はんっ、あっ!」
「ひっく……んっちゅ……苦し、はんむっ……あっく……はあ……」
「うううっ……息……はあ、頭……むふっ、白く……あ……」
「くああっ、んぐんんっ!!」
「ごほ、う、ううんんっ!!」
「けふ、くはっ……けほっ、い、いきなり……んあ、出さないで……」
「ドロドロが、喉に……ん、絡む、けふんっ……んあんっ……」
「ふんんっ……うう、こつちも……ブルブル、中で……震えて……」
「うん、はあ……んんっ、ひいい……」
「ぬ、抜いて……やああん……これ以上、出されたら……私、赤ちゃん……」
「あんっ、赤ちゃん……できちゃう……」
「うはあ、ああっ……んんっ、ふうああああっ!!」
「あ、はああ……また、出されちゃった……中に、私……」
「んんっ、ふっ……くうん……交代、えあ……いやああ……」
「ひっ……はああ……ま、待って……休ませて……」
「お、お願い……だから……身体が……限界、なの……うっんん、やああ……」
「きやあああっ! くはあっ……んあああっ……」
「んふっ、ま、また……乱暴に、お、おちんちん……入れて、んぐうんんっ!」
「あ、あ、あんっ……気絶しても……かはっ、お、おちんちんに……叩き、起こされて……」
「ひゃああんっ!!」
「おっくうう……あん、お願い……してる、のに……はあ……」
「連続で、こんな……するの、お、おかしい……あ、あ、ふわあああんっ!」

「ぎゃ、あああ……ねえ……セックス、あつ、したいなら、するから……くうっん……」
「うううっ、今のも……はあ、撮ったの……？」
「んあ……私が、自分で……するって、証拠……」
「ち、違う……私は、んふう……だ、だって……」
「もう、さんざん……されて……こうするしか……あくっ……んっ、んんっ！」
「くうっ、ああはあっ……本当に……あっ……っ、つらいのに……か、感じちゃう……」
「ひいひい……あは、んっ……せめて、はあ、早く……」
「んっ、終わらせて、あつ、はあっ……！」
「あああんっ……はふう、んんっ……あふっ……な、なに……今の……？」
「んあうっ……ひええっ……え、やだ……そこは、違う……」
「お、お尻の……穴は……はんんっ！」
「うくうあ、ふうう……使う穴を……ああっふ、増やすって、あんっ……」
「あ、あ、あっ……早く、終わらせて……い、言った、けど……」
「はあん、こんな……ことじゃ……ああんっ！」
「ひふう……グニグニ……お尻のお肉、広げられてる……」
「んんっ、く……いやあつ、そんなところ……見ないで……」
「ああ……お、お尻の穴まで……私の身体……もう……」
「自分より全部、うつく、みんなに……み、見られちゃった……おああんっ！」
「んはああ……おおんっ……ふっ、くう、う、後ろからおちんちん……」
「ああぐっ、んあつ、はっ……」
「きひい……ああん……おまんこに、入れられるより……ずっと……」
「あはああ……い、違和感が……んくうう……」
「ふあ、はあ……ふうう、も、もうずつと……訳なんか、わからないから……」
「気持ちいいのかなんて……そんなの……」
「ひいっ……うっ、んあつ、手も……こう、擦（こす）れば……良いの？」
「あああつ、手の中で、硬くなって、跳ねる……先走りを、塗って……広げるみたいに……」
「はあ……滑って、ヌチュヌチュ……音が、いやらしい……」
「はっ、あんっ……おまんこ……お尻も……両方で、動き出して……」
「くっ……ああっ、ひいひい……こんな、無理い……んふっ……かああ……」
「んつく……ひっ、あふ……うんんっ、すごく……擦れる！」
「あうう、おまんこの、壁が……削（けず）られる、みたい……につ、ひいひい……」
「はああんっ……うんんっ、お尻の……後ろからも、子宮がっ……押されて……」
「前からもコンコン……はうっ、あっ……」
「うああ……大きい……手の中の、おちんちんも……ああ、どんどん、大きくなる……」
「くううっ、ひああっ……も、もう……やだあつ、感じたく……ないいいっ……」
「んはああああっ！」

「んあつ、はつ、あああつ……」

「みんな、上手すぎ……私の身体……なのに、もう……全然、違う物……みたいに、ははあ
ん……なつちやつたあ……うああ、んんつ、ひやああ！」

「いあああああつ……はうう、わつ……はああ、私の中で……ぶつかり合って……」

「んつ、あつ、あ、ううう……」

「び、ビリビリ、する……はあ、頭の中……ずっと、痺れてる、みたいに……」

「はあ、ずつと……小さく、イクっ！ んああ、みたいに……」

「あつ、あつ、あつ、ひいいんっ！」

「戻れないっ！ はあつ……私、もう……とつくに……おかしく、なつちやつてる……」

「あ、ひいい……くあああつんんっ！！」

「はううっ、うっ……おちんちんが……震えてる……」

「精液、出したくて、ブルブルしてる……もう、そんな事まで……んっく、私……」

「手の中のもの……きゅっ、てしてないと……もう、ヒクヒクで……弾けちやいそう……」

「くうっ……カリがっ、引っかかって……ううんっ、感じる、大きい……イ、イクっ！」

「あああああつ、ひっいつ、うわあああん、くううっ……！！」

「ひああ……あ、熱い……精液が、かかって……私の身体、全部……」

「や、やけどしちやいそう……んあつ、ひああうっく！！」

「はあ……はあ……はあ……そんな……ま、まだあ……はあん……」

最後に、まだ順番が回りきっていないという部員の手が伸びてくるところで、私の記憶は途切れていました。

そして今は、

※以下非公開

⑤ サークル挨拶音声（購入者用）キャラづくりする必要なく、事務的に読んで下さい

「サークル、ケチャップ味のマヨネーズ」

「この度は本作品をご購入いただきありがとうございます」

「本作品は音声作品です。イヤホンやヘッドホンなどを使用して」

「椅子に座ったり、ベッドに横になるなどしてリラククスした状態でお聞き下さい」

「音声に気をとられすぎて椅子やベッドから落ちたり」

「物にぶつかるなどして怪我などしないようお気をつけ下さい」

「また、イヤホンやヘッドホンの端子が抜けていることに気づかず」

「スピーカーから大音量で本作品を再生した場合、あなたの人生に深刻な

問題を生じさせる恐れがありますのでくれぐれもご注意ください」

「それでは、本編をお楽しみ下さい」

⑥ 体験版ダウンロードの案内音声

「体験版をダウンロード頂きありがとうございます」

「あ、わたしですか？」

「わたしはバスケ部のマネージャーの宮下鈴乃（みやしたすずの）です」

「この作品はね、あこがれの先輩と私がデートするお話しなんだって！」

「えへへ！」

「楽しみだなあ……」

「先輩ね、すごくやさしいんだよ！」

「部活も一生懸命だし、カッコイイし……」

「私なんか先輩と釣り合わないから、せめて近くにいたらいいなって思って、

バスケ部のマネージャーになったんだけど……」

「先輩が私に告白してくれたんだよ！」

「えへへ……」

「もうすつごく幸せ……」

「この作品は、私と先輩のあまーいデートのお話しなのかなあ……?？」

「とりあえず体験版を聴いてみてね」

「体験版を聴いて、気に入ったら『あこがれの先輩に騙されて肉便器にされたマネージャー』

の製品版を買ってね！」